

友 情

ある日の6年生の教室をのぞくと、子供たちが静かに、真剣な面持ちで筆を運んでいました。毛筆の授業、いわゆる習字の時間です。3年生以上の児童は、年間でおよそ30時間、毛筆に親しむ時間があります。この日の題材は「友情」です。6年生にとって、特別な響きをもつ言葉です。

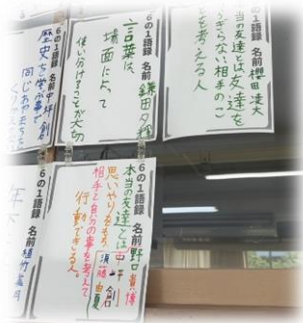


何枚もの練習用紙を重ね、納得のいく一枚に向かって集中する姿。筆先に込められた気持ちは、まさに一画一画に宿るようでした。「とめ・はね・はらい・おれ」に気を付けて筆を運ぶことが、この日のめあてです。先生がお手本を拡大して掲示し、学習の流れを示し、練習用のプリントを配布する。先生のしっかりとした教材研究や準備が伝わってきます。応えるようにして、文字に向き合うその6年生の背中からは、小学校最上級生としてのたくましさ、これまでに積み重ねてきた成長の証がにじみ出ていました。



「友情」という言葉が、6年生の心に響くのには理由があります。ただ仲良くするだけではなく、ときにすれ違い、ぶつかりながらも、相手を理解しようとする。自分の気持ちを伝え、受け止め合おうとすること。そうした葛藤や努力を経て、関係が少しずつ深まり、「本当の友達」へと育っていく。そんな時期にある子供たちにとって、「友情」とは、生きた言葉なのです。

授業の最後には、お互いの清書を見せ合い、良いところを伝え合う時間が設けられていました。「字のバランスがきれいだね」「右払いが力強い！」少し照れながらも、嬉しそうに頷く子供たちの姿が印象的でした。自分の努力が認められること、そして友達の良さを見付け、言葉にして届けること。その一つ一つに、「友情」の本質が宿っているようでした。



教室の壁には、「友達をうらぎらない」「本当の友達とは、相手のことを考えられる人」など、子供たち自身の言葉で綴られた「6の1語録」がずらりと掲げられていました。それらは、担任と子供たちがこれまで歩んできた日々の中で見付けた大切な想いを映し出しているようで、どの言葉も心に残ります。

これから6年生は、学校のリーダーとして、仲間とともに歩む日々を積み重ねていきます。その歩みの中で、きっとまた新たな「友情」のかたちに出会っていくことでしょう。

相手の思いを受け「とめ」
挑戦する勇気で「はね」上がり
嫌な気持ちは水に流し振り「はらい」
たとえ「おれ」ても、また立ち上がる

人生にも「とめ・はね・はらい・おれ」の美しさあり。

6年生の小学校生活最後の1学期が間もなく終わります。でも、「毛筆」がもう必要ないなんてことはありません。筆づかいには、人生をしなやかに生きる極意があるのでしょうか。

